

緑の地球

GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力



大阪市大理学部附属植物園で、岡田博園長(右から2人目)の案内で園内を見学する訪日団メンバー

Contents

訪日団報告～日本の森林・植物園に学ぶ	P 2
サントリー労組ワーキングセミナー報告	P 4
関東ランチイベント参加報告	P 5
広島・岡山写真展報告	P 5

2002.11

88

緑色地球ネットワーク第4回訪日団 日本の森林・植物園に学ぶ

神戸、大阪、北海道、東京……たくさんの方にお世話になりました

10月22日から13日間、大同から4回目の訪日団をむかえ、各地で研修・交流をおこないました。当初9名の予定でしたが、中国側の事情で7名での訪日となりました。

お忙しいなか見学・研修を受け入れてくださったみなさん、また、交流の機会を設けてくださったサントリー、サントリーフーズ、イオン、OFS各労働組合のみなさん、そして各所でさまざまなかたちでサポートして下さったGEN会員・協力者のみなさん、ありがとうございました。

この訪日団招聘には国際緑化推進センターから助成金をいただいています。

【訪日団メンバー】

- 邢 斌 (大同市青年連合会会主席)
- 郝軍生 (" 副主席)
- 趙亜雄 (霊丘県共産党委員会副書記)
- 武春珍 (緑色地球ネットワーク大同事務所所長)
- 魏生学 (" 副所長)
- 侯 喜 (" 技術顧問)
- 王 萍 (" 通訳)

【活動報告】

10月22日(火)

来日。夕刻、GEN役員による歓迎会をもちました。

23日(水)

奈良観光。開眼1250年の奈良の大仏さんをみながら、「雲崗石窟の仏像の方が大きい」とお国自慢も忘れません。

24日(木)

神戸市立森林植物園見学。用意して

くださった中国語の植物図鑑と園内の木々を照らし合わせながら案内していただき、育苗の現場を見学しました。

25日(金)

大阪市立大学理学部附属植物園見学。日本全国と世界各地から集めた樹木が育てられています。夜は、3軒にわかれてホームステイ。中国人留学生に、通訳ボランティアをしてもらいました。

26日(土)

大阪弥生会館で報告会と懇親会。報告会では、武春珍さんが苦労つづきの10年の活動を語り、緑化は情熱がなければできないけれども、情熱だけでは植えた木は育たない、失敗から学んで次の試みに生かしていかなければいけないと熱弁をふるいました。

27日(日)

札幌経由で音威子府へ。札幌では黄葉(紅葉は少ない)が終わりかけだったのが、音威子府では散りそびれた葉っぱが風に吹かれていただけ。天塩川温泉で移動の疲れをいやしました。

28日(月)

今回の訪日団のハイライト、北海道大学研究林での研修第1日目は、天塩研究林。あいにくの雪でしたが、訪日団メンバーは寒さには慣れています。温度は大同とほぼ同じ条件ですが、山間部では雪が2mも積もるそうです。気温が零下20～30 になっても、雪の下は氷点前後で植物が守られるのですが、大同では気温は同じでも雪が

ないため、小さなマツを寒さと乾燥から守るために土で埋めます。雪が多いと枝や幹が折れたりしますが、なければならぬ違う苦労があります。

山火事跡地に植えられているアカエゾマツは、蛇紋岩というアルカリ性の土壌でもよく生育し、粘土質の土にも強いということなので、大同でも



中国語植物図鑑で説明(神戸市立森林植物園)試してみたい樹種です。

夕刻、雨龍へ移動し、夜は大同の緑化について議論をたかかわせました。戦後、坑木にと大量にカラマツを植林したけれど、育ったころには炭坑がなくなっていたという苦い経験談や、北大の先生や研究林スタッフの「地域固有の条件によって方法は違っても、その地域に適した森を取り戻そうとする姿勢は同じ」「方法を学ぶな、思考に学べ」というお話には、大同のスタッフもおおいに触発されたようです。

29日(火)

北海道大学雨龍研究林で研修。天塩よりも寒く、雪も多いところですが、この日はみぞれまじりの雨。

天塩でも見た「掻き起こし」が、見事な縞模様となって見られました。掻き起こしとは、地表を覆って他の植物の発芽・成長を邪魔するササを重機で文字通り掻き起こし、他の樹種の生育をうながす方法。雨龍では帯状に掻き起こしをした植林地帯とササに覆われた地帯が交互にならんでいる造林地があり、その縞模様は印象的でした。

北大研究林でトドマツ、アカエゾマツなどの針葉樹と、ダケカンバ、ミズナラ、ハルニレなどの広葉樹が混交した森林をみて、大同でもこのような森林づくりをとあらためて思いました。

30日(水)

札幌へ移動、午後観光。北大植物園を案内していただいたあと、藻岩山から札幌の夜景を楽しみました。

31日(木)

東京へ移動。午後、浅草観光。思い



雨龍の朱鞠内湖で。左から、趙さん、侯さん、武さん、邢さん、王さん、魏さん、郝さん



思いにおみやげを買い込みました。
 11月1日(金)
 東京ディズニーランド訪問。OFSのみなさんにご案内いただき、移動の疲れを忘れて、おおいに楽しみました。
 2日(土)
 新宿御苑で交流。内蒙古で植林をしている人たちや、中国人留学生もまじ

えて語り合いました。関東 brunch の「みんなでカササギの森プロジェクト(?)」を、交流会、懇親会をつうじてアピールした結果、たくさんのご協力をいただきました。
 3日(日)
 成田国際空港から帰国。
 ほんとうにたくさんの方のご協力で、

今回の訪日団を成功裡に終えることができました。あらためて、ありがとうございました！



ホームステイ体験記

つながりがつながりと呼んで～

谷口、千秋 (2002夏のワーキングツアー参加)

会報でホームステイの募集を見て、ものの5分でGENの事務所に申し込みました。わが家に来ていただいたのは、この夏のツアーで一緒した侯喜さんと魏生学さん。そしてやはりツアーで一緒だった重松寛子さんが福岡からはるばる来てくださいました。通訳は、GEN会員で中国人留学生の郭小莉さん。郭さんに会えるまでは、重松さんと四苦八苦しながらそれでもなんとか筆談で会話を楽しみました。郭さんは初対面でしたが、もうずっと前から知り合いのように皆がうちとけました。
 夜は鍋とすき焼き。侯さんも魏さんもお刺身が大丈夫なのは驚きました。

侯さんは主婦のみかた！ 家庭の切り盛りや子どもを育てることの大変さを主人に伝えて、私を大切にしてくださいとお願いしてくださいました。魏さんはとっても子ども好きで、末っ子がじゃれていても気にせず、中国語を教えてくださいました。子どもの方が私よりも上手になったようです。お2人は畳の部屋に感動されたようです。ハブニングは、トイレの水。さすが水の大切さを知っておられる！ 水がタンクにたまるまで待たなくて、もとの栓を絞って流れなくなったりしました。
 郭さんは、通訳でなかなか食事ができなかったようですが、常にニコニコ

されてました。彼女と彼女のお母さんとの関係が素敵で聞くにつけて会いたくなりました。重松さんは私の片腕になってくれて、すごく助かりました。夏のツアーからいるんなつながりが増えたのが嬉しくなりました。

朝は、侯さんと魏さんと散歩。わが家の敷地面積をぴたりと当てられた侯さんには驚きました。この日は梅田で電気製品を買われるということで、梅田を歩いてお別れしました。

「ずーっといてほしい」という子どもたちの言葉と「わが家を自分のうちと同じに考えていつでも遊びにきてください」という主人の言葉をプレゼントした以外どたばたして何もできなかったけれど、私たちにとっては良い経験になりました。侯さん魏さん郭さん重松さん、ありがとうございました。

年末カンパにご協力ください！

関東 brunch では、今秋のイベントをつうじて「カササギの森」資金を集めようとがんばり、訪日団の交流会・懇親会までで1口分5万円+ を集めました。大阪事務所もがんばらなくっちゃ。というわけで、ゆとりがあれば、「カササギの森」にご協力いただけると嬉しいです。もちろん、ふつうの緑化基金、運営カンパも大歓迎です。
 発送作業の都合上、一律に郵便振替の用紙を同封いたしますが、最近ご協力いただいた方には重ねてのお願いで

はありませんのでご了承ください。
 * * * * *
 年賀状に絵はがき『中国・黄土高原』橋本紘二さんの写真で制作しました。『春』『夏』『秋・冬』『緑化』の4種類、それぞれカラー8枚組、1組(8枚)500円(送料別途)です。
 * * * * *
 年末年始にご家族でビデオ観賞をビデオ『よみがえる森』VHS・30分 価格5,000円(GEN会員価格4,000円) 送料270円別途

助成・ご寄付

日中緑化交流基金から9,200,000円の助成が決まりました。
 富士ゼロックス端数倶楽部と富士ゼロックス(株)からそれぞれ200,000円のご寄付をいただきました。

北京講演会のお知らせ

高見事務局長が北京で講演します。
 日時：12月3日(火)19時～21時
 場所：中日友好環境保護中心会議室
 参加申し込み：12月2日までにeメールで北京環境ボランティアネットワーク kankyounbeijing@hotmail.com へ。

2003 春のワーキングツアー予告

来春のワーキングツアーの概要が決まりました。
 日程：2003年3月24日(月)～31日(月)
 費用(予定)：一般=17万円、学生=16万円(国際航空

運賃、中国国内での交通費/食費/宿泊費、ビザ取得手数料、GEN年会費(含む) 中国国際航空利用 関西/成田空港発着(GENスタッフは関空発着便のみ同行) 定員：30人 申込み締切り：2月17日(定員に達し次第締め切ります)

植樹作業は、ほとんどできなかつたけれど……

中国黄土高原ワーキングセミナーの感想

小野 貴弘 (サントリーフーズ労働組合)

9月8日から15日まで、サントリー・サントリーフーズ労働組合のメンバー17名が、北京・大同・上海を訪れ、大同では昨年同様ホームステイを体験しました。

今年で5回目となるツアー、北京で故宮博物館を見学した後、寝台列車へ。食堂車ではありったけのビールを飲み干し、翌朝大同に到着。ホームで高見事務局長と堅い握手を交わす。1年ぶりの再会と、そしてもうひとつ理由があった。出発前にパスポートを紛失した参加希望者を何とか参加できるようにご尽力いただいたことに対する、言葉にできない感謝の気持ちだった。

懸空寺を見学し、広霊県の小学校付属果樹園で記念植樹に取りかかる。この時、まさか今回のツアーがこの記念植樹作業だけで終わるなんて誰も思わなかったのである。

翌朝起きると大粒の雨が降っている。40日ぶりだそう。恵みの雨を喜んでいると、悪路で今日の作業場所に行けないことが判明し作業断念。移動中にもスタックしたバスをみんなで押す場



たくさんの心をのせた千羽鶴を万人坑に供える

面もあり、道が流されてゆく、まさに「水土流失」を体験した。

翌日も雨だ。「カササギの森」に到着してバスを降りた瞬間に雨が激しくなる。「土石流が起きるかもしれない」という恐ろしい一言で、作業中止。誰だ雨男/雨女は? とみんなが思った時、自称「雨女」と「雪女」がいたんですね、やっぱり。だめだこりゃ。

予定を変更して、その日に万人坑を訪れた。我々は今回この場所に来るのには特別な思いがあった。昨年もこのツアーに参加した中山一喜さんが、昨年と今回のメンバーに呼びかけて千羽鶴を製作していたのであった。

中山さんに、なぜ千羽鶴をと聞くと、「ここに来ると犠牲になられた方に対して本当に申し訳ありません、という気持ちになる。今度来る時には何かを届けたいと思っていた。家族が入院したときに千羽鶴をつくった経験から、些細でも人の心に届くことはある、1人でも多くの人の手で折られた鶴に気持ちをのせられたらと思って声をかけました。本当に多くの方の“こころ”を届けることができた千羽鶴だと思います」と語ってくれた。

アクリル板の容器は自ら製作し、空港で機内持ち込みを断られながら、無事にここまで持ってきた。参加者も仕事の合間や行きの飛行機、寝台列車の

中でも折り続けてついに完成させた苦心作であった。万人坑の階段を登りながらこみ上げる気持ちとともに涙がでてきた。最後にアクリル板に今回参加したメンバーが名前を刻み、黙って心の中で手を合わせる。《少しでも“こころ”が、届くように……。》

大同最後の日、ようやく雨は上がるも時すでに遅し。落胆するメンバーを気づかってか、植樹のチャンスを与えていただいた。活着を祈って、ほんの少しでも植樹できることに喜びを感じた瞬間でした。

また、夜の懇親会の席では大同青年連合会の方に「何でもう1ヶ月早く来てくれなかったんだ」と言われてしまうほど、大同に恵みの雨をもたらした集団として記憶されたようだ。武春珍所長には「三得利(サントリー)は3杯」って白酒を勧められる。3杯一気はつらいですよといしながら、平気で飲んじゃうから大酒飲み集団としても認識されているようで……。

参加者からはワーキングセミナーではなくてグルメ観光ツアーではないかという痛い指摘もありましたが、大同を離れるときに参加者が充実した眼差しをしていたのを今でも覚えています。

最後に高見事務局長をはじめ大同市青年連合会の皆様、そしてホームステイを受け入れてくれた地元の皆さん、そして子どもたち。本当にお世話になりました。

我々は、来年も人生の大きな1ページを刻みにこの大同に戻ってきます。「回来了(ただいま)」と言いながら……。

経団連自然保護協議会 ミッションを迎える

9月29日の夜から10月1日にかけて、日本経団連自然保護協議会のミッション(大久保尚武団長、14名)を大同に迎えました。私たちの中心的なプロジェクトである環境林センターと実験林場カササギの森を案内し、そこで記念植樹。黄土高原の農村の生活もみてもらい、市長はじめ大同市幹部との懇談の機会ももちました。フジテレビの同

行取材がありました。

参加者からは、「まさに百聞は一見にしかず。自分の目でみないことには、このような農村のことはわからない」という声が強く、プロジェクトにたいしても高い評価がありました。そのあと一行は、タイのプロジェクト視察へ。

日中環境協力総合 フォーラムに出席

10月8日、9日と、北京の中日友好環境保護センターで開催された日中環

境協力総合フォーラムに招かれ、大同における緑化協力事業を報告しました。日本の外務省、環境省、中国大使館などと、中国の国家環境保護総局の共同主催によるもの。

大気や水の汚染、沙漠化、黄砂現象など、幅広い問題が議論されました。日本の中国にたいする政府間協力は、曲がり角にきていますが、そのなかで、環境協力は今後いっそう強化されるであろうという印象をもちました。

(高見)



写真展 『中国黄土高原 ～砂漠化する大地と人びと』(広島・岡山) 報告

昨年の京都、名古屋、大阪につづいて、広島と岡山で、橋本紘二さんの写真展『中国黄土高原～砂漠化する大地と人びと』がJR西日本の主催で開催されました。

期間中、GENから説明スタッフを派遣したほか、地元のボランティアの活躍で、無事終了しました。

広島(9月20日～26日)

会場がJR広島駅の新幹線口前だったこともあり、平和都市広島を訪れた外国人や、旅行帰りでスーツケースをひっぱりながら黄土高原の風景に見入る方もおられました。期間中の入場者数は約5,000人。新聞、テレビの取材

もあり、来場者につながったようです。平和運動でボランティアに馴染みがあるのか、みなさん気軽に立ち寄ってくれました。

過去のツアー参加者や、古くからの知りあいなどボランティアの応援もあって、写真集が11冊、絵はがきは96組売れました。

岡山(9月30日～10月6日)

JR岡山駅の2階コンコースが会場でしたが、あまり人通りの多い場所ではなく、期間中の入場者数は1,000人をこえる程度。そのなかでは、新聞、テレビの報道を見てきた人がけっこうおられたようです。岡山大学の先生・学

生をはじめとするボランティアのみなさんのサポートがありました。写真集4冊、絵はがき43組が売れました。

お手伝いいただいたボランティアスタッフのみなさん、ご来場くださったみなさん、ありがとうございました。



関東ブランチから

国際協力フェスティバル2002 参加報告

環境フェスタくはたち

関東ブランチでは、10月5、6日と東京の日比谷公園で開催された国際協力フェスティバル2002と、10月11日に東京の国立市で開かれた環境フェスタくはたちに参加しました。前回と同様、橋本紘二さんの写真パネルを展示し、切り絵や絵葉書、書籍などの販売もおこないました。

日比谷公園での国際協力フェスティバル2002では、曇り空の中、環境・緑化はもちろん、様々な国や地域を支援する200を超える団体が参加しました。2日間でのべ7万人が参加するという



ブースで訪問者と話がはずむ

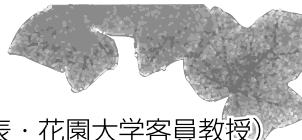
大規模なイベントのため、GENのブースに訪れ、展示を見てくれる方も多く、外国の方も多数来場していました。GENのブースの周りには、環境問題を扱う団体用の区域になっており、写真パネルを見て熱心に質問する方や説明ボランティアと話しこむ方など、緑化そして中国への関心の高さをあらためて感じました。今年は黄砂の被害が日本で大きく報じられたことで、黄土高原と聞くとすぐに黄砂を思いうかべる方も多く、緑化の必要性をより身近に感じてもらえたように思いました。また、関東ブランチのメンバーも他の団体の見学をおこない、他のNGOやNPOとの相互交流もはかれました。この他には世界各国の料理に舌鼓をうったり、チャリティーマラソンの5・10・20kmのコースをメンバーの3人(うち2人は20km!)が走るなど、フェスティバルを盛り上げるべく、関東ブランチメンバーも積極的に参加をしました。ぜひ来年は、チャリティーマラソンの

団体戦をTeam GENで走りましょう。参加者募集です。

国際協力フェスティバル2002が、環境問題などに関心の高い人のためのフェスティバルだとするならば、環境フェスタくはたちは、地域密着型のアットホームな雰囲気イベントでした。当日は、天気にも恵まれ、気持ちの良い秋晴れの1日となりました。会場ではフリーマーケットやリサイクルの家具や自転車の販売があり、無料包丁研ぎや電化製品の修理などは生活展と共同開催であることを感じさせます。直接パネルを見てくれる方だけでなく、売り物である切り絵や絵葉書に関心を寄せた後に、写真のパネルを見てくれる方も多く、国際協力フェスティバル2002との違いを感じました。環境フェスタくはたちでは、黄土高原の歴史を説明した手作り紙芝居の台本ができあがり、それをもとに子どもたちに紙芝居や人形劇をおこないました。

両イベントとも多くの方に写真パネルを見ていただき、かささぎの森への寄付などもしていただきました。関東ブランチとしても、個人としても、とても実りのある参加だったと思います。またこのような機会があったら、関東近辺の方はぜひ見に来て、そして参加してください。(藤沼潤一)

植物を育てる (19)



立花 吉茂 (GEN代表・花園大学客員教授)

樹木の種子発芽

種の多様性のお話は一応終わりにして、今回から緑化に必須の作業である種子まきの基礎知識を勉強しよう。野生の植物の種子は栽培植物の種子と違い、蒔いても生えないことが多い。そのことは以前にここに書いたから省略しよう。今回は植物の小グループをまとめて実験した結果を報告しよう。

ウルシ属植物

この仲間は日本に5~6種分布するが、昔から発芽の難しい植物群として知られている。ウルシの植林やハゼの栽培のために2~3の種子発芽促進処理の実験報告がある。しかしあまりよい方法が書かれていない。著者の実験では硫酸処理がきわめて有効で80%以上発芽させることができた(図)。すなわち、5種のウルシ属植物は無処理でほとんど生えず、濃硫酸1分処理でもわずか2~3%しか生えないが、15分 30分 1時間と処理時間が進むにつれ発芽率が高まり2~4時間で最高に達した。この実験のうち、ヤマウルシだけは硫酸処理後1カ月低温処理の必要があったが、他の4種はその必要

がなかった。種子が成熟してからすぐに処理して蒔いても、1年間貯えても同じ結果がえられた。しかしヤマウルシは短い低温期間が必要であったから、発芽不良の原因が硬実だけでなく、短い休眠期間があることを示している。いまのところ、硬実と休眠をあわせもつ植物はヤマウルシだけである。

ハゼノキの発芽

この実験で種子を硫酸処理しない場

合、発芽率はゼロであったが、ひとりハゼノキは1~3%発芽し、さらに2~3カ月おくと40%近く発芽したが、他の種類は20%以下であった。このハゼノキはもともとは琉球原産で、ローソク採種のために本土に移入され、各地に植栽されたものである。近畿地方に野生するハゼノキは別種ヤマハゼであり発芽のパターンは全く違う。この2種はよく似ているが、ヤマハゼには葉に多くの軟毛があるので区別できる(近畿地方の山野に多くのリュウキュウハゼがエスケープしているのでまぎらわしい)。

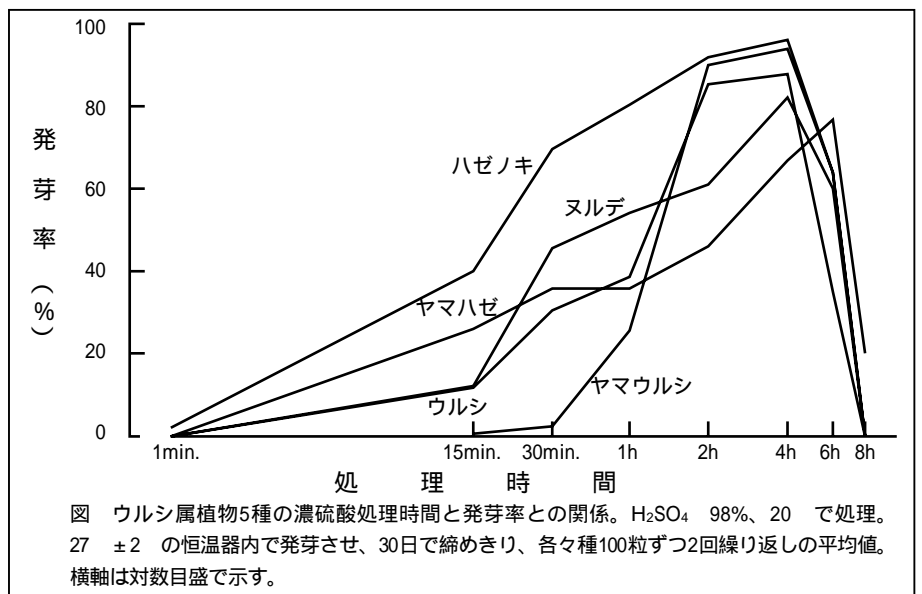


図 ウルシ属植物5種の濃硫酸処理時間と発芽率との関係。H₂SO₄ 98%、20℃で処理。27 ± 2 の恒温器内で発芽させ、30日で締めきり、各々種100粒ずつ2回繰り返し試みの平均値。横軸は対数目盛で示す。

GREENなんでも勉強会 黄河紀行 その3・黄河源流域

黄河中流域の現状について語っていただいた前回からずいぶん間があきましたが、最終回は黄河源流域のお話です。標高も高く、湿原もある源流域のようすを豊富な写真で見てください。

日時：12月10日(火) 18時30分~20時30分

場所：大阪市立弁天町市民学習センター (JR環状線・地下鉄中央線「弁天町」駅下車すぐ)

講師：小川房人さん (GEN顧問、元大阪市立大学附属植物園園長)

参加費：700円

問合せ・申込み：GEN事務所まで

私の本棚

「トラが語る中国史 - エコロジカル・ヒストリーの可能性」 上田 信著 / 山川出版社 / 1,300円 (税別)

上田さんからトラの写真が付いた年賀状をいただいたことがある。その頃上田さんは会うたびに「トラ・トラ」とつぶやいていた。関東プランチの面々はよく分からないながらも上田さんの迫力に圧倒され、「トラなのね」とうなずき、トラをモチーフにした人形劇や紙芝居が生まれた。

前著「森と緑の中国史」が中国史の枠を広げ中国環境史に到る過程が書かれたのであれば、この本は歴史の枠を広げたさまざまな視点でひとつのテーマ「トラ」を掘りさげる試みである。

「私はトラである。もうこの世にいない。」という書き出しは面白そうだし、字も大きく薄い本だが、実はかなり難しい。一度に読み下すのは大変だ。

トラの眼は自由自在、縦横無尽に駆け巡る。トラの住む森林、森をつくる樹木、トラの餌、ヒトとの関わり、中国三千年の歴史、トラの文学、信仰。興味をもてることから読んでいくのもいいと思う。行きつ戻りつ読むうちに、一見かけ離れているように思える一つひとつのことが複雑にからんでつながっているのが見えてくるはずだ。

この本の主役アモイトラは絶滅危惧種である。上田さんはこの本の印税の一部を保護のために寄付されるそうだ。(宮下利江 2000年春ワーキングツア参加)

黄土高原史話〈10〉

中国の臍（へそ）はどこだろう

谷口 義介（摂南大学教授）

10年ほど前、上海で聞いた話に、若者の間ではやっているのはキョンキョンと工藤静香とか。今はおそらくピンチー・ブーこと浜崎歩（あゆみ）。折しも今秋は日中国交正常化30周年とて、その認定事業の北京コンサートでは、さぞかし人工的メイクアップとヘソ出しルックが、かの地のファンを魅了したことでしょう（もちろん歌も）。

私事ながら、「近江は日本のヘソ」と滋賀県人（だけ？）は信じています。

では、中国のヘソはどこか。

現在でいえば、南北大動脈の京広鉄路（北京 広州）と長江水運（重慶 上海）が交差するので、湖北省の武漢が最有力候補。土地の人は「九省通衢」といって自慢しますが、同省が境を接しているのは実は6省。「九」は基数の最大数ゆえ「多い」という意味もありますから、さしずめ「すべての道は武漢に通ず」といったところでしょう。

しかし歴史的にみると、中国のヘソは河南省の洛陽。ただし、北宋が当時物流の中心地となった開封に都を定める以前の唐代まで。

「中国最古“幻の王朝”夏は実在」「四千年前の城跡を発掘・河南省」「出土品など有力根拠」「始祖・禹の王城の可能性」「中国誌が発表」。

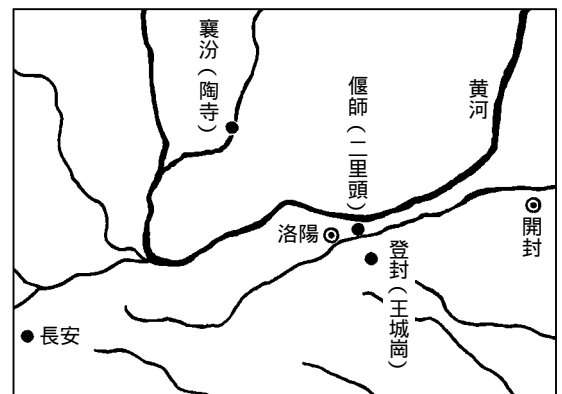
今から20年ほど前、釧路でソバ屋をやっている友人が、83年3月30日付「北海道新聞」をわざわざ送ってくれました。もちろん、同じような大活字が全国紙の一面トップにも。

20世紀初め、それまで伝説とされてきた殷（商）王朝（B.C.1600～1055年頃）の実在が、甲骨文の発見や殷墟の発掘によって証明されてから、中国の古代史・考古学界の関心は、もっぱらその前の夏王朝に向かいます。時へて、雑誌『文物』83年3期号は2本の論文を掲載、河南省の登封県王城崗遺跡こそ夏王朝の都、とほぼ断定。洛陽の東南50キロに当ります。これとは別に、偃師県二里頭遺跡で検出された宮殿址を夏時代の王宮とする見方もありますが、これも洛陽の東25キロ。

ワタクシ的には、もともと夏族の本拠は山西省南西部、汾水下流の東側、崇山西麓に広がる襄汾県陶寺遺跡（B.C.2400～1900年頃）で、その勢力がB.C.2000年頃、洛陽周辺のどこかに進出して都を建てた、と考えています。

この夏王朝のあと、殷が偃師商城を築き、西周が副都として洛邑を造営、東周になって首都とし、とんで後漢・曹魏・西晋が都を構え、北魏が大同から遷り、隋・唐が東都として重視したのも、この地が豊かな農耕地であるうえ、四通八達する交通の要衝だったから。天下に号令するためには、洛陽を抑えなければなりません。

ちなみに、洛陽盆地を囲む南の伏牛山脈から東の嵩山あたりまで、黄土高原に入ります。



関東ブランチ伊豆合宿 参加者募集！

日程：12月7日（土）～8日（日）

場所：静岡県立土肥高校の生活館「輝潮館（きちょうかん）」（静岡県田方郡土肥町土肥870-1）

費用：宿泊費300円＋シーツクリーニング代200円。食費別途。

食事：お弁当をとるか、豚汁とお握り程度の自炊もできます。天気の良いければバーベキューなども可能。予算がゆるせば新鮮な伊豆の海の幸も。お酒持ち込み可。

その他：学校に小さな（5人程度）温泉があります。地域の温泉（300円）も利用できます。

交通：

1. 鉄道利用……東海道線三島駅から伊豆箱根鉄道駿豆線終点の修善寺駅で下車。東海バス堂ヶ島行きで50分、馬場（ばんば）で下車、徒歩約3分
2. 自動車利用……東名高速道路沼津インターにおいて、1号線を箱根方面に向かい、三島から136号線で船原峠を越えて土肥着。沼津インターから伊豆中央道、修善寺トンネルを通り約1時間30分。

内容：意見交換・情報交流など

【フィールドワーク】

クマザサに覆われた西伊豆の山、天城山、スケールの大きなワサビ田などを見て、8日の午後2時が3時頃には修善寺までお送りできると思います。

定員：男女各20名程度

問合せ・申込み先：藤原國雄（〒

410-3501 賀茂郡賀茂村宇久須153-3
TEL.0558-55-0530 e-mail:kunio@mail.wbs.ne.jp）または上田信（e-mail:ueda@rikkyo.ac.jp）まで申込み締切：12月5日

土肥は温泉と海がきれいな過疎の町です。若山牧水がこよなく愛した町といわれています。伊豆の大自然のなかで、森林がはたす役割を体験してみませんか。

予約参加者には、藤原さんが作成した2002年夏の黄土高原ワーキングツアーの写真CD-ROMをプレゼント！





世界水フォーラム交流プラザ 京都連続講座
「第3回世界水フォーラム」から
パートナーシップを考える

日時：11月29日（金）19時～21時
場所：世界水フォーラム交流プラザ
京都3階第1会議室（京都市中京区
竹屋町通烏丸西入151 地下鉄烏丸
線「丸太町」駅1分 TEL. 075-254-
7211）
講師：天野輝芳さん（島津製作所環
境・安全推進室）
参加費：無料
主催：世界水フォーラム交流プラザ

市民が進める温暖化防止2002
京都議定書批准から始まる新たな歩み

日時：12月14日（土）10時～17時
30分、15日（日）10時～12時
場所：ハートピア京都（京都府立総
合福祉会館）世界水フォーラム交
流プラザ京都（地下鉄烏丸線「丸太
町」駅下車すぐ）
参加費：一般1,500円、気候ネット
ワーク会員・学生1,000円
主催・問合せ：（特活）気候ネット
ワーク（TEL. 075-254-1011 FAX.

075-254-1012 e-mail : kikonet@
jca.apc.org URL http://www.jca.
apc.org/kikonet/)
分科会 14日10時～12時30分
全体シンポジウム 14日13時30分
～17時30分
特別報告「進行する世界温暖化」
Poni Faavea氏（ツバル環境省・予
定・逐次通訳あり）他、討論等
町並みウォッチング「京町家と破壊
される町並み（仮）」15日10時～12時
場所：姉小路界限 定員：40名
詳細は気候ネットワークにお問い合わせ
ください。

見て、聞いて、体験して、理解する
国際協力のお祭り

ワン・ワールド・フェスティバル

日時：2003年1月11日（土）11時～
17時30分、12日（日）10時～17時
場所：大阪国際交流センター（地下
鉄「谷町9丁目」駅、近鉄「上本町」
駅下車）
主催：ワン・ワールド・フェスティ
バル実行委員会（事務局 〒543-
0001 大阪市天王寺区上本町8-2-6
大阪国際交流センター2階（特活）
関西国際交流団体協議会内 TEL.
06-6773-0256 FAX. 06-6773-8422
e-mail : onefes@hotmail.com)
入場無料

内容

NGO、政府機関、国際機関、企業
などの国際協力活動を紹介。GENもブ
ース出展します。また、民族音楽・舞
踊のステージ、「世界の手話講座」、民
族料理の屋台などもりだくさん。関西
の国際交流団体が一堂に会する機会
です。ぜひ、お立ち寄りください。

【シンポジウム】「みんな地球の子ども
たち」11日14時30分～16時30分

【パネルディスカッション】

「ここが変やで、お互いさま！」11日
12時～14時

「パレスチナとイスラエルは共存でき
るか？」12日15時30分～17時

パネリスト

土井敏邦さん（フリージャーナリスト）
白杵 陽さん（国立民族学博物館教授）

編集後記

訪日団ホームステイを受け入れ、原
稿も寄せてくださった谷口さんにお礼
を兼ねてメールを出しました。「お風
呂のトラブルはよく聞くけど、トイレ
の水栓は初めてです。すると、お返
事に「実はお風呂でも……」。あらあ
ら。もう1軒の高瀬さん宅でも（ペッ
トのウサギにも）歓待していただき
ました。たくさんの方々のご厚意で、
訪日団は無事終了。本当にありがとう
ございました。（東川）